

レジデンス・イン・森下スタジオ ヴィジティング・フェロー

マリアナ・アルテガ パブリック・トーク

「私はもう一人のあなた、あなたはもう一人の私：メキシコのコンテンポラリーダンス」

□ 開催日時：2014年10月11日(土) 14:00-15:30 □ 開催場所：森下スタジオ

本パブリックトークでは、メキシコのコンテンポラリーダンスの現況として、現在、注目されているメキシコのアーティストとそのネットワークの状況、また、コンテンポラリーダンスを支援する仕組みについて、事例を交えながら解説していただいた。

### 《はじめに》

マリアナ・アルテガ：

初めまして、マリアナ・アルテガと申します。私のプロジェクトのタイトル「IN LA KECH - HALA KEN」はマヤ語に由来する言葉です。マヤはメキシコの南部に起きた文明で、誰かに会ったときに「こんにちは」という意味で使います。それは「こんにちは、お元気ですか」という挨拶ではなく、直訳すると「私は別のあなたよ、あなたは別の私」という挨拶で、相手に自分を見出し、相手によって自分を知ることです。

まずは、日本に滞在する機会を与えて下さったセゾン文化財団に心から感謝をします。この機会がなければ、日本のコンテンポラリーダンスのシーンを知る機会がなかったと思います。そして、日本に滞在し、日本のコンテンポラリーダンスへの好奇心と熱意を高めることができました。

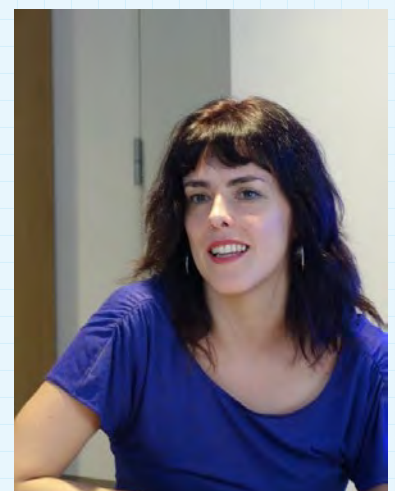
今日は私の国についてお話をいたしますが、メキシコのコンテンポラリーダンスの現況や、コンテンポラリーダンスを支援する仕組みや文化機関についてご紹介したいと思います。私は英語が母国語ではないので、原稿を読みながらお話をいたします。

### 《メキシコのコンテンポラリーダンスのアジェンダ》

私たちの芸術的な活動は地理的、政治的、経済的、そして、社会的文脈に影響を受けています。現在、メキシコのコンテンポラリーダンスでは、これまでに受け継がれ、教えられてきた芸術的な思考であるモダニティから一定の距離を置くプロセスにいると思います。そのモダニティとは、特権的身体を必要とし、完全な技術や直線的な物語性、ブラックボックスの劇場、観客が前から観ているという観客との関係性などの特徴があるものです。そのモダニティから距離を置く、またはそれを破壊しようとする動きがありますが、その背景には、メキシコと言ったときにもメキシコは一つではなく、数多くのメキシコが存在するはずという考えがあるからです。また、公的組織も、これまでのダンスではない、モダニティとは異なるの別の可能性を追求する活動を理解しよう

としています。この話を進めるにあたって、まず説明しなければいけない文脈があります。それは、歴史的な観点からメキシコを植民地化された国と捉えてきた国々が、メキシコと世界をつながる窓口であったということです。私たちは欧米のモダニティから美学的思考を受け継ぎ、今、そのモダニティを破壊しようとしています。その破壊するモデルも西洋のモデルを参照している場合があります。私の申し上げているプロセスというのは、ある意味、自分たちの歴史的な状況を再考する作業です。新しい世代のアーティストはこれまでの美学的思考とは距離を置き、まだ、それを表現する段階までには至っていないかもしれませんが、ある美学的思考との関係性に問いを投げかけています。

また、市場とモビリティについて考えることも重要視されています。例えば、ラテンアメリカでコンテンポラリーダンスをプロデュースする方法やモビリティに、欧米の舞台芸術の市場のモデルが役に立つのかという問いです。なぜなら、私たちの文化そのものを考えたときに、踊るということが文化の根本にあるからです。しかし、コンテンポラリーダンスのパフォーマンスやその考え方を共有するためには、私たちはどこに行くべきで、どうしてそこへ行くことが重要なのか。私たちの作品は、どのように見られ、認識されているのか。私たちは未だに欧米の美学のヘゲモニーに従って、それに反応し、再構築しているだけではないのか。こういった問いに私たちは直面しています。そのため、私個人は他の国では美学がどう扱われているのかにとっても興味を持っています。日本に来たことで、自分たちの国の状況がどうなっているのかを再考する機会になるからです。



マリアナ・アルテガ

## 《メキシコのコンテンポラリーダンスのトレンド》

メキシコで何が起きているのか、コンテンポラリーダンスにおけるトレンドは何かをお話します。メキシコのダンスはこれまでのモダニティからコンテンポラリーへの移行期において、身体とメタファーについて考えています。具体的には身体へのアプローチをメタファーとして捉える試みを行い、創作のために他の分野と対話の機会を持つようにしています。例えば、美術や建築等です。なぜ、そのような対話が重要かという、そのように芸術分野が分割されていること自体が、モダニティ的な考え方だからです。そのため、美術や建築を別々の分野と捉えるのではなく、それを超えた考え方に挑戦しています。

ダンスをより理解していくためには、エンターテインメントとしてではなく、政治的、文化的、美学的な思考が必要で、私たちの文化の根本にあるものとしてダンスを考えることが重要です。振付をするという行為はダンスの文脈でのみ発生する固有な作業ではありません。振付は私たちと空間の関係を構成するフォームであると思います。物質や空間、主張、市民権、デモンストレーション等から振付を考えることが可能で、それらが振付の出発点になるということです。もちろん、その考え方自体も含むことができます。

ダンスに関わる全ての人がそういった思考の段階にいる訳ではなく、これまでのモダニティの文脈の中で活動している人もいます。それが悪いということではありません。今、私たちが考えていることとは別の文脈にいるということです。また、これまでのモダニティという考え方とコンテンポラリーという考え方の中間地点にいる人もたくさんいます。例えば、作品の中でビデオを扱い、コンテンポラリーの中で思考しているつもりの作品でも、身体の捉え方がモダニティな方法を引き継いでいたりします。あるいは、公共の場で振付から主義主張を唱えようとするアーティストであっても、観客を舞台の前に座らせ、その前でパフォーマンスをする振付をしていたりするからです。そういう意味でも、過渡期にあります。一方で、デジタルカルチャーの普及によって様々な知識へのアクセスが民主化したことで、身体やダンスに対するコンテンポラリーの考え方は後押しされています。それはインターネットで映像を見られるようになったということではなく、刺激的な考え方にアクセスできるようになったということです。新しい世代はこのようなデジタルカルチャーの中で育っています。こういったプロセスの中で、自分のアーティストのボイスを見つけた新しい世代のアーティストもいます。

次に、アーティストの事例を紹介し、メキシコのコンテンポラリーダンスの現況を理解していただけたらと思います。

## 《メキシコで活躍している振付家・ダンサー》

まずは、タニア・ソロモノフ (Tania Solomonoff) というアルゼンチン出身で、メキシコで活動をする振付家です。建築や音と関係するメタファーを探究する創作を試みています。

「木」という意味を持つスペイン語『Madera』がタイトルの作品で、木を扱い、人と物質との関係性をもとにしています。木で組み立てる、それを壊すという行為が繰り返されます。

(映像：タニア・ソロモノフ作品)

タニア・ソロモノフはコラボレーション等、数多くの国際プロジェクトに関わり、また、アルゼンチンの独裁主義から逃れて亡命してきたという背景を持っています。アーティストもモビリティによって、アーティストとしてのパーソナル・ボイスを見つける場合があると思います。

次は、ハシル・ネリ (Jaciel Neri) というアーティストで、メキシコの文化的なパーソナリティを翻訳して舞台上で表現しています。「私たち」という意味のスペイン語『Nosotros』がタイトルですが、友情の美しさと、それによってどのように未来を描くことができるのかをテーマとした作品です。ダンサーも仲が良い友人で、何年も活動を共にしています。

(映像：ハシル・ネリ作品)

もう少し広い視点でいくつか紹介したいと思います。アナベラ・パレファ (Anabela Pareja) という若い振付家が、『El Fin De Los Principios (終わりの始まり)』というタイトルで、友人へのインタビューをもとに様々なダンス作品のオープニングを集めた作品をつくりました。多種多様なオープニングだけが延々と繰り返される作品です。彼女は物体の振付、音の振付、身体の振付というように考えて、創作しています。作品では、例えば、「演劇の始まりは飛行機が飛び立ったときではないか」という誰かの言葉を引用し、始まりとは何かという問いに対する答えを、どのように解釈してダンス作品にするのかというのが、彼女の挑戦でした。「演劇が始まるのには時間がかかる」という誰かの意見には、5分間、ステージ上では何も起こらないことを再現しました。

別のコンセプチュアルな作品では、マスクを扱っているのですが、人が集まって音楽を演奏します。それは、米国的なバンドではなく、バンダという概念です。その作品は劇場でも、公共の場でも上演できます。メキシコの都市部における伝統的な音楽を用いて、作品をつくるのが少なくなく、都市部の広場で、突然、上演をするということもあります。



パブリック・トークの会場

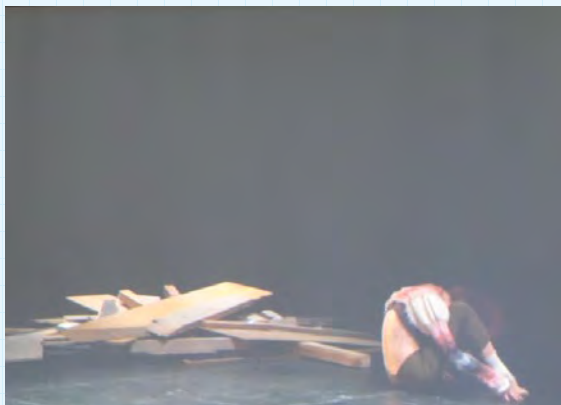


次は、コラボレーションの例です。日本では、日本と韓国のアーティストのコラボレーションというのが盛んに行われていると思いますが、ここで紹介するのはメキシコのデルフォス (Delfos) という有名なコンテンポラリーダンスのカンパニーの振付家、オマール・カルン (Omar Carrum) と、コロンビアの優れたアーティスト、ラディニール・ロドリゲス (Vladimir Rodriguez) のコラボレーションです。『書かれた馬鹿馬鹿しさ』という意味のスペイン語がタイトルの作品で、即興についてのリサーチをもとに、動きのドラマツルギーについて考えています。以上が、メキシコのコンテンポラリーダンスの現況の一部です。

### 《ラテンアメリカの文化、市場の再考》

先程、情報へのアクセスが民主化された影響についてお話ししましたが、もう少しそのことについて話を続けたいと思います。今、アジアの人たちはお互いのことを知ることで、自分たちを知るという再考の段階にいます。ラテンアメリカも同じような状況です。ラテンアメリカの文化を再考する際には、ボアベンチュラ・ジ・ソウザ・サントスというポルトガルの社会思想家や、ネストル・ガルシア＝カンクリーニというメキシコの人類学者がよく参照されています。これまではフランスの思想家を参照して物事を考えるという傾向が強かったのですが、現在はラテンアメリカ圏の思想を参考文献として用いる動きがあります。個人的にも興味を持っています。

今、ラテンアメリカ全体のことをお話ししましたが、メキシコは政治的にも経済的にも地政学的にも南米とは別の独自の歴史を持っています。メキシコは地理学的には北米に属するので、米国と中央アメリカや南米との仲介のような存在として機能することが多いですが、南米のリアリティを共有していないため、南米と意識が離れてしまっているかもしれません。しかし、デジタルカルチャーが普及したことで、その距離が縮まったと思います。例えば、ブラジルやウルグアイで新しいダンス・フェスティバルが始まっていますが、ここではエクステンジとサステナビリティが優先課題となっています。ブラジルの「アクセスの外で」というムーブメントを背景にして、ホストカルチャーという取り組みが始まりました。



トークで紹介されたタニア・ソノモノフの作品『Madera』

それは、ダンス・フェスティバルに参加する興味を持っているが、ホテルに宿泊するお金がないアーティストのために、そのアーティストの宿泊の世話を家でしてくれる市民を見つけて、無料で滞在できるようにするという取り組みです。ブラジルで始まったホストカルチャーをウルグアイでも実践しています。その滞在によって、観客も増え、交流も生まれています。この取り組みは助成というものへの問いかけであると同時に、舞台芸術の市場を再考することでもあると思います。作品を売るということで経済が成り立つという市場の仕組みとは別のオルタナティブな考え方を提示し、作品を売るということ以外で、経済や人が活性化していくからです。これまでの舞台芸術の市場の考え方であつたら、どこかのプログラムで作品を見せるということは、そこで作品が売れたということですが、毎年、そこで作品が売れない限り、常にそこで見せることができません。これはコンテンポラリーダンスのコミュニティを再考するプロセスの一部だと考えています。それはどのようにフェスティバルを組織するのか、また、どのように舞台芸術の市場へアプローチをするのかということです。例えば、米国の市場のように、売ることによって経済が成り立つ、でも、逆に買ってもらわないと成り立たないというのは、私たちの経済的なリアリティからは離れています。そういう意味では、経済のオルタナティブな考え方を模索する過渡期にあるのですが、実際に作品をつくっていくために、どのように資金を集めるのかという現実的な問題もあります。日本のアーティストにメキシコでレジデンスやコラボレーションをしてもらいたい場合や、また、私自身がより海外へ移動することが可能になるためには、どこから、どのようにして資金を調達することができるのかということです。

### 《メキシコのコンテンポラリーダンスを支援する仕組み》

メキシコはラテンアメリカの中でも文化や芸術の支援に非常に力を入れている国で、支援の仕組みを制度化しています。メキシコでは、文化や芸術に関わる活動の 90% を公的資金が支えているため、民間による支援はあまりありません。日本ではトヨタ・コレグラフィーアワード等、民間企業によるアートの支援を目撃するのですが、私にはそのような支援には馴染みがありません。



トークで紹介されたFoco al Aire produccionesの作品

ダンスを含めて、文化や芸術の領域で仕事をしている人は、National Council for Culture and Arts(以下、NCCA)と関わっています。そこから、ほとんど全ての公的資金が提供されているからです。例えば、メキシコの若いアーティストで、一年間、創作のための時間が欲しい場合は、まずは、National Fund for Culture and Arts(以下、NFCA)に相談に行きます。その組織は、NCCAの傘下にあります。そして、NFCAの助成に申請します。NFCAは数多くの公募をしていて、ダンスであれば、振付家が作品をつくるといった創作、パフォーマーが振付家と一緒に仕事をするといった共同制作、そして、アーティスト・イン・レジデンスなどがあります。例えば、カナダのバンフセンター等、国が提携しているレジデンスに滞在することもできますし、それとは別に、個人で見つけたレジデンスに対して、国から支援をもらうことも可能です。公募の枠以外でも、海外にプロモーションをした作品がある場合、それを個別に相談することもできます。劇団やダンスカンパニーで稽古場を所有していて、メキシコの文化芸術の振興に貢献できる組織の場合は、1年間に10万米ドルぐらいの支援をもらうことができる枠組みもあります。

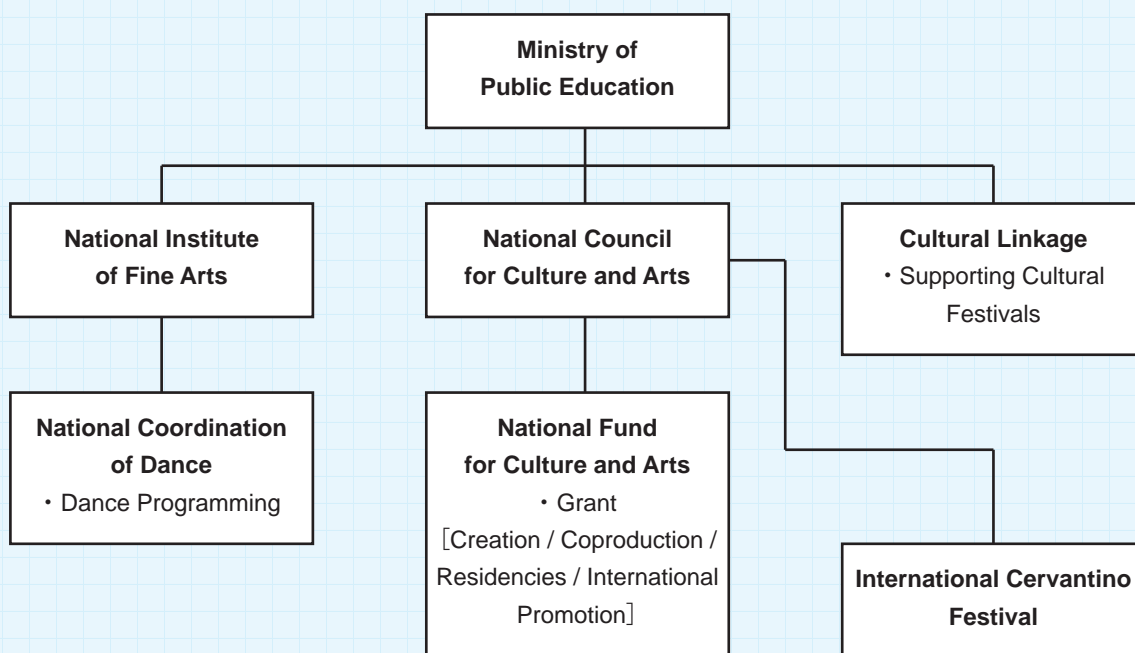
また、National Institution of Fine Artsという組織には、国のダンスのコーディネーションをする部門があります。その部門の重要な活動の一つがNational Festival Netです。配布したディレクトリーの、National Dance Coordinationのリンクにアクセスするとメキシコにたくさんのダンスフェ

スティバルがあることが分かります。ちなみに、このディレクトリーでは国の情報ではなくて、インディペンデントなフェスティバルや文化機関を整理しました。

例えば、助成金をもらって作品をつくった場合、National Dance Coordinationに相談に行き、フェスティバルのプログラムに入れてもらうように交渉します。(他にもいろいろな方法がありますが、代表的な方法を説明しています。)さらに、自分がフェスティバルのオーガナイザーである場合、National Council for Culture and Artsに相談に行き、Cultural Linkageを紹介してもらい、自分のフェスティバルを実施するための助成金を申請します。数多くあるフェスティバルの中でも、国のフェスティバルとして組織されている代表的なフェスティバルは、Cervantino Festivalです。過去に、日本から山海塾やパパ・タラフマラ、チェルフィッチュが招へいされました。

一方では、これらの制度には良い点と悪い点があります。まず、私たちの憲法上で国民が文化にアクセスできることが保障されています。そして、政府も市民に文化を提供することを責任としています。しかしながら、そのような強固な構造を持っていることは良いことであると同時に、文化の生産が制度化されてしまっているのではないかという疑問もあります。例えば、アーティストが作品をつくるときに、助成金を獲得することができる作品をつくるためにはどのようにすべきなのかを優先的に考える傾向にあることです。言い換えると、創作に強いモチベーションがあるのではなくて、資金を

図表:メキシコの支援の仕組み



\*マリアナ・アルテガ氏プレゼンテーションシートをもとに作成

獲得するための作品づくりになってしまっているということです。つまり、国の組織は文化を活性化するという立場であるべきで、文化の提供者ではあってはいけないと思います。国の仕組みは、まだ、変革の時期にありません。例えば、国は作品をつくるために資金を提供はするが、民間組織や企業をつなぐような取組みをしていません。これまでの経済とは異なる仕組みを提案できるようなことはしない。だからこそ、私たちのようなインディペンデントで活動している人たちが出てきて、新しい動きをつくっているとも言えます。そういう意味では面白いことが起きています。

インディペンデントなフェスティバルでは、国から資金を調達し、インディペンデントな方法で、地域を活性化しようとしています。例えば、あるコミュニティでコンテンポラリーダンスを見せたいと考えているが、国はそこまで視野に入れない場合、インディペンデントなフェスティバルを組織し、国から資金を獲得できるようにします。また、ある人が遺産として住宅を引き継いだとします。その住宅を改造して、アーティスト・イン・レジデンスにしたいと考えた場合、その一部を森下スタジオのように、80人ぐらいの観客を動員できるスタジオやブラックボックスのような劇場空間につくり変えることもできると思います。インディペンデントに組織することで、そこでどのようなプログラムを見せるのかということも自分たちで決めることができます。こういった動きがメキシコでたくさんあることで、実際に数多くの国際共同製作の実例が生まれています。それらの代表的なフェスティバルや文化機関をディレクトリーに記載しました。これらは親密で、パーソナルで、直接的な関係でつくられている事例です。ただし、ディレクトリーにある団体にアプローチする際には、メキシコでお金を稼ぐということではなく、「出会い」という投資だと理解してください。これらのレジデンシーに滞在する場合、そこで新たな文化を創造し、その作品を見せることができるかもしれませんが、十分な謝金がもらえる訳ではないと思います。でも、そこに滞在することによって、メキシコのネットワークについて知ることができます。さらに、メキシコに行くことで、南米にもつながることができると思います。今、私は日本にいますが、私が日本にいることをウルグアイのフェスティバルのオーガナイザーは知っています。私が日本でどのようなことをして、どのようなものを見て、どのようなことを知るのかを報告してくれることを心待ちにしています。つまり、メキシコと南米の距離が非常に短くなっていて、メキシコに行くということは、南米ともつながることができるということです。欧米と同じようなマーケットがメキシコにあるということではありません。そういう意味でも、インディペンデントのフェスティバルであったり、カンパニー、レジデンシーのプロジェクトが盛んになっています。そのような状況の中で、私たちが課題と考えていることは、より国際的に人が国を超えて移動できるようにすることです。例えば、“ヨーロッパ”や“南米”という枠組みに限定せず、より広い視点でアーティストの対話を推進したいと思います。

そういった中に、日本も含まれているので、私の同僚たちは、私が日本の現状を知ることができることを喜んでます。そして、私が日本とメキシコをつなぐことで、日本のアーティストをメキシコに受け入れる基盤もできています。対話をして、作品をつくる準備もありますし、メキシコのアーティストが日本に来る準備もあります。そういう意味で双方向の交流の扉を開きたいと思います。

(以下、質疑応答、略)

## ヴィジティング・フェロー 滞在概要

マリアナ・アルテガ メキシコ  
ダンス・キュレーター、アーティストック・ディレクター  
2014年9月22日(月)－11月2日(日) 滞在

テーマ：「私はもう一人のあなた、あなたはもう一人の私」：日本とメキシコのコンテンポラリーダンスにおける将来の芸術的、社会的な出会いの場

内容：日本とメキシコのコンテンポラリーダンスのコンテキストを共有し、将来的な共同製作やコラボレーションを視野に入れた対話の可能性を探る。滞在中、若手から中堅を中心に数多くの振付家や制作者と面会し、ネットワークを構築。将来的な共同制作やコラボレーションの可能性を検証した。

### [滞在後の展開]

日本とメキシコの交流の事業の一環として、2015年4月、振付家・ダンサーの川口隆夫氏をメキシコに招聘。今後、現地のアーティストとのコラボレーションとの可能性を探る。



メトロポリタン自治大学で社会コミュニケーションを専攻。ダンス公演のプログラミングやマネジメントを行い、2006年から2011年までの5年間「Internarional Dance and Electronic Media Festival (FEDAME)」のディレクターを務める。現在、デジタル文化センターのダンス・キュレーター、「El Gran Continental Otra vez」のディレクターとして活動している。また、2013年、TPAM in Yokohama 開催時に、来日。